

特別養護老人ホーム入所待機者の実態に関する調査報告

日本福祉大学 横関 真奈美 (会員番号 4727)

近藤 克則 (日本福祉大学), 杉本 浩章 (日本福祉大学)

〔キーワード〕 特養入所待機者, 待機可能期間, 虐待

1 研究目的

特別養護老人ホーム入所待機者(以下,待機者)は 33 万人ともいわれている。その中で,緊急に入所が必要なのは 2-3 割(健康保険組合連合会,2003)との報告があるが,現場からはもっと多いとの声もある。そこで,本研究では以下のことを明らかにする。第一に,主観的健康感や介護負担感など介護者本人の状況,第二に,在宅療養の様子を最も知りうる第三者であるケアマネジャーによる,虐待などのいわゆる「不適切な介護」などの状況の評価,第三に,家族介護者とケアマネジャーの両者がそれぞれ評価した待機可能期間,第四に,在宅介護を続けるために必要と介護者が考えている施策は何か,の四点について明らかにすることを目的とする。

2 調査対象と方法

A 県が把握していた待機者約 2,500 名のうち,調査時(2004 年 9 月)に在宅サービスを利用していた者の介護者及びケアマネジャーである。利用者 200 名以上の 33 事業所に調査票を送付し,2 種類の調査を依頼した。一つは,担当ケアマネジャーを通じ家族介護者に記入を依頼した介護者調査,もう一つは担当ケアマネジャーが記入するケアマネ調査である。回収数はそれぞれ介護者調査 384,ケアマネジャー調査 462 であった。別に,10 保険者で在宅サービスを利用していた全要介護者を対象に実施した介護者調査(n=4081),ケアマネジャー調査(n=6737)を対照群とした。

3 結果

1. 介護者の主観的健康感は,「よくない」・「あまりよくない」をあわせると 46%,夜間に 2 回以上起きるものが 50.5%,介護協力者なしが 70%であった。介護負担感では,「精神的にもう精一杯である」という質問項目に「非常に思っている」と回答した介護者が 38.6%であった。一方,「できる限り家で世話してあげたい」に「非常にそう思う」と回答した介護者は 23.6%にとどまっていた。うつ傾向では,GDS 項目中「問題なし」が 124 名(39.6%),「うつ傾向」にある者が 100 名(31.9%),「うつ状態」であった者は 89 名(28.4%)であり,対照群の 52.0%,32.5%,15.5%と比べ,「うつ状態」の者が 12.9 ポイント多かった。
2. 「不適切な介護」では,身体的・心理的虐待,介護放棄などのいずれかに問題があった「不適切な介護」ありは 82 人(18.3%),どちらとも言えない(否定できない)は 76 人(17.0%)で,両者あわせると 158 人(35.3%)と対照群の 19.4%よりも多くみられた。要介護度別に比較をしても,同様の結果が得られた。
3. 入所待機可能期間では,家族介護者の評価で「すぐに入所させてほしい」者が 32.9%,ケアマネジャーの評価で「すぐに入所が必要」と判断された者は 20.9%であった。「半年から 1 年なら在宅可能」まであわせると,家族介護者の評価で 57.1%,ケアマネジャーの評価で 64%であり,約 6 割の者が 1 年以内の入所が必要ということになる。
4. 自宅での介護期間を延ばす方法を介護者にたずねたところ,ショートステイの拡充としたものが最も多く 64.3%であった。また,ショートステイを柔軟に利用できることを必要とした介護者が 7 割であった。

4 まとめ

「うつ状態」にある者が 29.1%など,待機者を介護している者の状況は厳しく,担当ケアマネジャーからみても「不適切な介護」が 34.5%,1 年以内に入所が必要と思われるものが介護者・ケアマネジャーのどちらの評価でも約 6 割を占めているなど,入所を必要としている者は従来の報告よりも多い。また,在宅期間の延長にはショートステイの整備が有効とする介護者が多いことが示された。